

0. 問題設定

「脱文脈化」との関係

ルーマンに対して向けられる批判：現状肯定維持的な理論¹。

①しかしルーマンの理論をよく検討してみると必ずしもそう言えない。特にルーマンの方法論・理論に注目すると、むしろ「システム」を含む存在の別様可能性の発見を認識利益とみなしている。それは特に「存在論」の脱却をはかる、という初期ルーマンの学的営為によく現れている。②同時に、システムの合理化はいかにして可能かという問いもまた、初期ルーマンの議論を特徴付けている点。

社会的行為の文脈を提供するシステムの別様可能性と、その合理化の可能性は、どのように両立可能だと言えるのか？この点について、初期ルーマンの中心的な議論から検討する。

1. 等価機能分析の提唱

(1) 社会学的機能主義の論理とその困難

- 機能主義：被説明事象(雨乞いの儀式)の機能的貢献(社会的凝集性の高まり)が「原因」となり、それ以外の事象(秩序の維持)が「結果」として実現している。
- 批判：①分析的な一般的枠組の適用により機能(要件)を特定。体系的な理論形成には都合がよいが、場合によってはかなり無理が生じて、単なるこじつけのような印象に。②因果的説明に還元可能であるか、還元されたとしても機能的代替項目の存在により因果的説明としても不十分に。これらの批判は1960年はじめには表面化。

(2) ルーマンによる「機能」の再定義と「等価機能分析」

- 「機能」：代替可能な選択肢を構成する規則。
- 「等価機能分析」：初発の機能分析から得られた結果をもとに、それと等価な機能的代替項目を発見して比較する方法。

①典型的な機能主義が失敗したのは、被説明事象の一義的な因果論的説明すなわち「存在論的」思考に基づいていたから。比較の方法に特化することによる機能分析の脱存在論化。

②特定の機能的準拠点から自由。社会構造全体に機能を関係づけるのではなく、何らかの「問題」に関係づける。社会に存在するある事象が、機能的貢献をする場合もあればそうでない場合もあるという事態を矛盾なく説明。

2. 「システム/環境」図式と意味システム論

- 等価機能分析と両立可能なシステム理論の構想

比較を可能にするために、①特定の問題解決に複数の機能的項目が存在する可能性を許容し、②特定の問題の外部にも複数の問題設定を許容するような理論。すなわち、システム概念の脱存在論化が求められる

¹ こうした批判は次のようなハーバーマスの批判にほとんど由来する。「世界の複雑性の縮減を社会科学的機能主義の最高の準拠点として正当化しようとする試みの背後には、支配に従順な問題設定、つまり既存のものの存立維持のための弁護に、理論をこっそりと義務づけようとする態度が隠されている。ルーマンは正の哲学の非合理主義をより精緻な仕方では復活させる。というのめかれは、社会自身の再生産のために必要とされる様々な強制に社会理論を無批判に屈服させることを、すすんで理論の方法論的自己理解のなかに定着させるからである。このことによって、理論はテクノクラシー的な使用にとっておかれるようになる。理論の革命的な誤用は排除される。そして主観主義は、システム研究を既存のものの存立維持という要件に結びつけることによって、その修正原理を見いだすのである」(Habermas/Luhmann 1971=1987: 216)。

る。これにかなうのが、システム／環境図式と意味システム論。

- 「システム／環境」図式

システムを外部(環境)との差異によって定義。(1)システムに含まれる可能性以外の諸可能性が環境。システムと環境に含まれる可能性の総体が世界(システム+環境=世界)。(2)世界に含まれる可能性から限定された可能性がシステム、限定されなかった可能性が環境。限定された可能性からのさらなる限定によって、事実的なシステム状態が成立している。

- 意味システム論

ある意味は、それ以外の意味との差異によって、その意味をもつ。

①ある社会的システムは、意味によって、システム／環境の差異を確定する。

②否定経由で、環境との選択的な関係が可能になる(複雑性の縮減)。「A／非A」という形式で、外部を内部的に処理する。例えば法システムは、支払いが滞っている状態を「破産」と定義し、「破産宣告の開始」というかたちで対処。

③ある社会的システム内部で生起する行為は、システムが含むそれ以外の諸可能性との差異で意味をもつ。伝統的な行為論では、行為は目的を徐々に実現していく過程であったが、ルーマンにおいては時点的な「出来事」(「存在論的」位置をもたない)。

3. 等価機能分析とシステム理論との関係

- 「複雑性の縮減」、「合理化の可能性」という準拠問題で一致。
- システムの合理性とは、変化する環境からの影響に対処できるだけの可能性をもつこと。システムごとに合理性基準はことなるが、等価機能分析は特定のシステム準拠を交換可能であり、可能性領域を開示する方法であるから、システムの合理化に貢献できる。

4. 社会学的啓蒙

- 1967年の教授就任講演以来のルーマンのスローガン。
- 経験科学と規範科学の連携を復活させること。
- 学問領域とそれ以外の領域それぞれの自律化により、「善き目的」や「望ましさ」が一致しなくなった。
- 「望ましさ」としての「システム合理性」。「一致しないパースペクティブ」を逆手にとって、等価機能分析とシステム理論は、社会学的な啓蒙を可能にするのではないか。

5. 自己参照的システム理論におけるシステム合理性概念

- 1980年代以降のルーマン理論のポイント。①システムの作動としての要素産出。②「パラドックス」として、システムが作動停止する場合を説明。パラドックスの契機は、正／負の値を割り当てられた二値コードで、自己参照的作動をすると生じる。つまり、システム外部の可能性領域を視野におさめて作動するシステムは、たえず崩壊の危機にある。

※以前の議論では、最終的に否定しえない否定性としての、システム／環境の境界。

- システム合理性の再定式化：システム／環境差異を、システム内部で主題化できるシステム。つまりパラドックスという作動停止の契機をいかに展開できるか。
- 初期合理性概念との相違：①脱パラドックス化は、ある意味では根拠のでっちあげ。無条件に称揚できない。②後期ルーマンでは機能分析の議論に言及しなくなる。機能分析が担うとされていた合理化への貢献、これの機能的等価物が不明。